

連載

コラム

都市論とファスト風土論を持続せよ 仲俣暁生

003

特集

慈しまれる? モダニズム建築

- I 解説・保存史年表「モダニズム建築の保存」がもたらすもの 004
倉方俊輔
- II 事例
- 東京女子大学東寮・旧体育館の保存運動 008
藤原房子
- 東京・大阪中央郵便局庁舎の保存に関する取組み 010
南一誠 / コメント: 河村たかし
- 坂倉準三「旧飯箸邸の再生」 012
高代恭博 / コメント: 今泉卓也
- 重要文化財、世界遺産候補としての「国立西洋美術館本館」 014
山名善之
- 国際文化会館保存再生の成果と課題 016
兼松紘一郎
- 日土小学校の保存活動の現状について 018
花田佳明 / コメント: 梶本教仁
- 大学セミナー・ハウス、築40年目の激動 020
齊藤祐子
- 蘇った? メタボザウルス・都城市民会館 022
ヒラカワヤスミ

連載

建築マンガ

NEVERENDING MUSEUM 益子 悠 024

海外に学び日本に学ぶ

建築を逆照射する方法論の礎 ライザー十ウメト事務所 北川啓介 025

建築雑誌ジャック

FLAT フラットの輪郭 FLAT歴代OB座談会 小林聖明・竹田拓史・篠元貴之・安藤裕太 026

ヒト

構造家「佐藤 淳」 028

建築ロゴス再考

バブル 弾けた後に定着した言葉の15年史 平塚 桂 030

テクノロジーの眼

震動を制御する振り子 032

建築学鳥瞰

都市郊外の高齢化に建築計画学はどう応えるか 園田真理子 034

建築みやげ・建築グッズ

けなげな建築キャラ「ひろばくん」 田中元子 038

編集室

マンガ家のまなざし 藤村龍至 038

募
画し
、大
に資
経済
!つて
)
17時
大会梗
報する
デザイ
建築

ふじわら・ふさこ

東京女子大学卒業／元日本経済新聞編集委員／著書に『母の台所 娘のキッチン』『生活上手のエッセンス』ほか／『手の智恵——秘められた可能性』で1979年第一回サントリー学芸賞、1991年日本記者クラブ賞受賞、1995年男女共同参画社会づくり功労者内閣総理大臣表彰

東京女子大学東寮・旧体育館の保存運動

藤原房子 [ジャーナリスト／東京女子大学 レーモンド建築東寮・体育館を活かす会代表]

日本初 鉄筋の学生寮

建物保存の難しさは、それに託す精神的価値への感度と思入れに左右される点であろう。東京女子大学東西寮は、男女を通じて日本で初めて鉄筋コンクリートで建てられた学生寮だった。大正中期の生活水準や生活様式から見て、鍵付きの百の個室を持ち、集中暖房や水洗トイレ等、近代的な生活設備を備えた寮は、あらゆる意味で画期的だった。

この大学は主として米英加のキリスト教プロテスタントの教派を超えた強力な財政支援で設立された。1918年新宿区角筈の仮校舎で発足、1924年春から現在の杉並区善福寺のキャンパスに移った。最初の建物が東西寮である。関東大震災直前の空中写真では、外郭は完成寸前だったが大きな被害はなく、翌春に予定通り学生を迎え入れた[写真1]。1984年の閉寮後は西寮を解体し、東寮は学生の部活動のために一部模様替えをして利用してきた[写真2]。

設計者アントニン・レーモンドはフランク・ロイド・ライトの元から独立したチェコ系アメリカ人。自伝に言う「カール・ライシャワー博士がキリスト教女子大学の総合計画と建築デザインを委託してきた。(中略)第二次大戦までライシャワー博士によって厳格に守ら

れていた。しかし戦後、学校の指導者が日本人となり、基本計画と関係なく、建物が敷地いっぱいには散らばってしまった」と。行間に漂うレーモンドの深い失望・落胆を私は感じるが、さらに最初の建物が壊されることなど彼は想像できたのだろうか。

学寮は創立者の教育理念を形に示したものであった。日に一度は一人になって内省し、祈ることを学生に促そうと、それにふさわしく簡素だが必要最小限の条件を整えた。狭くはあったが建設時の生活実態からいえば時代を先取りしたもので、とくに戦後は外地引揚者や都市部の戦災で自宅が類焼した学生には、この小さな部屋は心底幸せな場であった[写真3]。

寮では学生の自主性を尊重し、基本的に自治制度をとった。鍵をかければ誰に煩わされることもない空間は、個の確立の厳しさを実感させるものでもあった。寝食を共にしつつ多彩な個性が出合い、時には否応なく自我がぶつかりあうなかで、自治あるいは個の確立というものを体感する場である。集団のなかで味わう孤独や内面の葛藤、飾らない行動で生涯の友を得る機会にもなった。

解体告知と運動の始まり

さて、東寮解体を含む理事会決定のキャンパス整備計画を、同窓生が初めて知ったのは



写真1 | 完成間近の東京女子大学東寮 (1923 [大正12] 年7月25日撮影)
1923年9月1日の関東大震災を生き抜いた、キャンパスに最初に建てられた建築物。



写真2 | 東寮外観（玄関）



写真3 | 同内観（学生用の個室）



写真4 | 東寮解体の様子

2006年6月、同窓会総会の席だった。こよなく学寮の生活を愛し、その価値を知る一人として私は耳を疑い、保存と適切な活用を願って卒業生グループのメール仲間に意見を求めたところ、賛同の声が多数集まった。寮生活を体験しなかった同窓生からも心強い支持があった。ここで「卒業生有志の会」が発足した。

構内にはレーモンド設計による九棟の建物があった。うち七棟は1998年に文化庁の登録有形文化財に申請、指定済みだ。解体を通告された二棟は保存に値しないのか、補修に耐えないほど劣化したのか。必要ならば補強し、さらなる維持が可能ではないか。他方、建築史や技術史から見て文化的・史的価値を評価できないか。専門家に実地に見ていただき、ご助言を参考に大学に意見書を出した。

理事長との三回の面談では積極的活用策として、大学の史資料を保管・展示するアーカイブズ、セミナー室、研究室への転用などを提案した。他方、キャンパスに戦後早くに建てられ、すでに老朽化が話題になっている一部の建物の改築をこそ急ぐべき、と意見を述べ、検討してみるとの口約束も得たが、納得いく答はなかった。要望文書は十余回提出、返信は六回、最後の公開質問状に返事はない。

一方、同窓生の理解・賛同を得たいと考え、同窓会の理事会とも懇談したが、話し合いは平行線だった。また、同窓生のほか一般市民の応援も受けて保存要望の署名を集め、面談のたびに持参した。現在までに一万二千人近くに達したが、卒業生の比率が低いと指摘された。そこで卒業生の真摯な思いを訴える理事長・学長宛の直訴のはがきを自分の言葉で書いてもらい632枚を提出した。公開の催しでは2006年12月日本外国特派員協会でのシンポジウム、2007年春学内園遊会での自由参加おしゃべり会、同年夏新宿でのパネルディスカッションなど一般の理解を求める活動も続けた。

これらと前後して新聞・雑誌等、活字メディアに計十三回、電波ではNHKに地域ニュースのごく一部で四回報じられた。専門家による保存要望書は日本建築学会関東支部、日本建築家協会関東甲信越支部、アメリカペンシルヴァニア大学有志など九件を数えた。

体育館（社交館）の保存に向けて

学寮はその隅々に校舎よりも学生の濃密な思いを宿している。それゆえにか運動の過程で元寮生の意外な反発に直面した。心を許した旧友の予想以上に強い非難である。汚れるまま放置された建物は、消えて当然とする一部の人たちが仲間を説得に回った。風化により加わった美しさが認められない。

深刻な対立をよそに今年8月末から9月にかけて、轟音とともに土埃を上げて寮は破壊され〔写真4〕、樹齢九十年の樹々も伐採された。続いて厨房・洗濯場・ボイラー室など生活の中核機能を担った美しい外観の白塔、愛称エントツも壊され、後には巨大な地下機械室等の空間が、円形の黒い口を空に向けた。

現在残っている優美な体育館〔写真5,6〕は構内に空地を確保するために、2009年春に解体と聞く。体育館は「社交館」とも称した。あえて社交としたのは、あらゆる場で女性がひるまず行動できる力をもたなくてはとの創立者の意図を映している。スポーツのみならず、それを通して明るい会話がはずむ暖炉を備えた複数の談話室、会合に利用しやすいバルコニー、学生の茶目っ気を触発する設備など、類似の施設にはない優雅さとユーモアが随所に折り込まれ、卒業生はその記憶を共有し価値を認めている。寮の合同晩餐会場、ダンスパーティー場、戦時中は軍需工場にもされた。

愛すべき建物は、現在も体育の授業、各種クラブ活動、学生の多彩で自発的な催しの会場などとして活用されている。保存運動は、学生の共感と支持を得ながら軸足を移し動いている。



写真5 | 体育館（社交館）外観



写真6 | 同内観